

真宗教学の方法論的課題

桃 井 信 之

「真宗学」を営む者にとって常なる重要課題は、親鸞が明かした「浄土真宗」の仏道の本質・内実（信念体系）を抽出し、現代人の成仏道として再構築すること、未来社会をも射程にいれながら考究していくことであろう。

しかし「真宗学」の現状を鑑みる時、その教学を考究し構築する営為において、多くの方法論的な課題があると考えるので、そのいくつかをピックアップし、整理してみようというのが小論の目的である。

《「教義」と「教学」の混同》

第一点は、「教義」と「教学」の混同の問題である。

「教学」という用語は、その概念が不明瞭のまま漠然と使用されてきた感がある。そのため「教学」について論じる際、誤解や弊害があったことは否めない。殊に本願寺派の伝統的な宗学の立場（江戸宗学については大谷派の場合も同様）が、先達が宗学者としての生命をかけて「微に入り細を穿つ」と評される程周到緻密に大成させたにも拘らず、徳川幕

藩体制化における封建的性格を有した「訓詁注釈学」的「会通学」としばしば酷評されてきたのは、畢竟「教学」という概念を「教義」と混同している点にあるのではないか。

大谷派近代教学の祖と称される清沢満之は、明治期に西洋より移入された近代の学的方法を逸速く修得し、この問題に關して極めて示唆的な主張をしている。⁽¹⁾

即ちその意は、親鸞が明かした「浄土真宗」の「教義」と現代真宗「教学」とを混同してはならず、両者は明確に区別されるべきだというものである。「教学」は末学の私見学説という分限に止まり、その是非の基準はあくまで「教義」そのものに帰すべきである。何故なら「教義」の本質は普遍的であり、「教学」は「教義」の本質を時代（或は社会的）に弁証したものに外ならないからである。またそれ故にこそ教学的営為については自由が保証されるべきだとも語っているが、このことについては後述する。

《「真宗学」する人格（主体的領解）の問題》

次に「真宗学」を営む主体（人格）の問題を取り上げてみたい。

近年までに発表されている真宗学の方法論に関する論文でほぼ共通していると考えられる主張は、端的に言えば、「真宗学」は一般の諸学同様、客観的・実証的「科学」という側面を持つが、一方で「真宗学」が有する独自の性格として、研究者自らの宗教経験が要求される、ということに関するものである。

「教学」を創造していく「真宗学」の研究者に求道心が不可欠というのは、「教学」が親鸞の明かした仏道の本質を抽出し現代人をして親鸞の教えに帰せしむるというのであるから、当然といえは当然であるが、

1 「真宗学」が親鸞と同様の宗教経験・宗教的信念の獲得を重視するのは、親鸞の教学的営為がそうであったように、基本的にはその「智慧」から仏の本心・仏道の本質を見抜く（例えば善導は観經解釈で古今指定をなし、法然は専修念仏の教義を立て、親鸞は改点改訓・隱顯等の釈を文言の奥、即ち『義』に見出ししている）からであろう。しかし後で問題とするように、このことは教学的な位置を得ていない。

2 「教学」を生み出す「真宗学」は今日、その営為は如何にしても客観的・実証的な方法に基づく科学的な営為・近代の理性の営為を媒介としなくてはならない。ならば、直截に

いうなら、学術的な研究発表の際、基本的に、真宗学以外の分野を専門とする研究者にも理解し得る用語・論理を用いるべきだと考えるが、「真宗学」の場合、一方で自己の宗教経験・主体的領解を介して親鸞の宗教的信念を論ずるためか、今日でも「真宗学は、ただの学問ではない」等の言葉を耳にする。「主として規範的学であることを強調する真宗学は、極めて主観的なものであって、それを学として承認することは困難であるというのが、学会における一般の風潮^{（ふうそう）}」であるという指摘もあるが、教団の伝統や歴代の相承をいたずらに権威化するところから、「会通」を目的とした難解な宗学用語を用い、教団内の政治的場で研究内容の是非を論じたり、延いては、「研究者」の「研究内容」をもって未だ研究者に「異安心」というレッテルをはろうという動きがあるのも事実である。

従来の見解と異なるものを異端と断ずる発想は、非学問的であると言わざるを得ない。解答を先に与えることを前提としては、学問は成立しないと考えるからである。

このように清沢のいう教学における自由討究は、未だに保証されていない実情がある（野々村直太郎事件の教訓が生かされていないともいえよう）。これでは教団内に席をおく研究者は、異端者として廃されることを恐れるあまり、自由大胆な発想を以て従来の枠を超えた研究成果を挙げられず、現状の

如くその教学的営みが、歪なものになってしまっても罷むを得ないであらう。

『いのち』を見い出す論理が教学の中で明示されているか』

更にもう一点指摘しておきたい。現代及び未来における諸問題に応答していくための教学的営為は決して少なくない。個々の研究者がそれぞれに方法を持ち、仏教・親鸞にアプローチしている。従来論じられてきた人間の権利・尊厳に関する問題、反戦・平和に関する問題などに加えて、近年殊にクローズアップされてきたのが脳死・臓器移植・バイオテクノロジーに端を発する生命倫理の問題、それに地球的規模の環境破壊の問題である。全ての問題を単純に同列視することはできないとしても、「いのち」に関わっているという点で共通している。近年、仏教あるいは真宗・親鸞の立場から「いのち」が論ぜられ、次々と研究成果も発表されている。

例えば、環境破壊の問題は、人類を存亡の岐路に立たせているが、それは西洋近代的合理主義、科学万能主義、人間中心主義の所産であるとしばしば指摘される。そこでこの問題の根本的解決に東洋思想、特に仏教思想、が寄与できるのか、が盛んに論ぜられているようである。なるほど「衆生」「不殺生」「草木成仏」「一切衆生悉有仏性」という発想はヒューマニズムを超えて「いのち」を把握するものであるし、「山

川草木悉皆成仏」「草木国土悉皆成仏」に至っては、科学的な意味での生命の範疇を超えて「いのち」を論じているのであり、人類を救う哲学に成り得る大きな可能性を有していると言える。

親鸞にも『唯信鈔文意』（西本願寺「真宗法要本」）に「草木国土ごとくみな成仏すとけり」とあるものがしばしば取り上げられている。

周知の如く、これは「本覚思想」との関連もあり、本来の仏教思想ではないとの指摘も近年なされているようである。

またこれはアニミズムではないかという見解もあるが、真宗関係の研究者は、親鸞にアニミズム的要素はないとするものがほとんどであらう。

しかし問題は、「親鸞が草木国土の成仏を語っているから」という典拠に重点をおくよりも、「何故親鸞にはそのように語り得たのか、何故そのように見ることができたのか」を問うべきだということである。

即ちそこで親鸞が語っているものは、親鸞が念仏の信心に生きる仏道のなかで、自己を含めて明らかに見えてきた「いのち」、即ち「信心の智慧」によって明らかに見い出された「いのち」なのである。

親鸞が、信心を得ることは、即ち「智慧」を得ることであると明確に語っていることは周知のところである。

つまり親鸞は、「如来から賜」った「信心の智慧」により、自らを生かしている多くの「いのち」を発見（自覚）し、更にその「いのち」を生かしている山や川などの非情（生態系ともいべきもの）にさえ「いのち」を見出したのではあるまいか。それは同時に「二種深信」で示されるような深い罪悪性の自覚と如来の本願に対する確信でもある。このような親鸞による「いのち」の発見はアニミズムとは異質なものであろう。

親鸞の信心は「智慧」として「いのち」を見出すと同時に自己の罪悪生死性を自覚せしめるものである。かような事態が個々に成立するならば、それは環境問題等、「いのち」に関わる問題を浄土真宗の立場から考えうる主体といえるのではないか。加藤尚武氏は、生命倫理と環境倫理はテーゼが悉く正反対、即ちそこには個人と全体の対立があり、両方を視野に入れて判断する必要性を説いている。⁽³⁾

我々真宗者が「いのち」についてどう判断するのか、ごく近い将来問われることは必定である。問題は、そのような「智慧」の明確な教学的位置づけが未だになされていないというところにある（伝統的宗学では、このような主張を認めず、「徳」という観念的な理解に終始していた）。

このことについては梯実円氏が「真宗学とは、『教行証文類』を正しく理解し解説するということに止まらず、『教行

証文類』を自己の全存在をあげて書きついでいくということではないでしょうか。仏祖に導かれ、育てられた信心の智慧によって、如来、浄土にふれながら、自己と人類がかかえている危機的な状況に向かってよびかけたまう如来の御言葉を記しとめていくのが真宗学者の使命だろうとおもいます。現代の課題に答える教学といっても、時代の痛みを自らの内に実感していなければなにごともし起り得ないでしょう⁽⁴⁾と述べている。真宗学する者にとって肝に命ずべき言葉であらう。

「信心の智慧」によって「いのち」を発見し、深い罪悪性を自覚した念仏者は、自らの可能な限り如来の心に適うべく生きようとするであらう。その生きざま・行動が世間を指向する念仏の弘通に直接的・間接的につながっていくならば、それこそが報恩行といひ得るものなのであらうし、このような念仏者の生きざまを私は「真宗菩薩道」と名づけたい。「智慧」を明確に位置づけた「真宗菩薩道」ともいうべき教学の構築が今求められていると考えるのである。

- 1 「因果之理法」「貫練会を論ず」
 - 2 幡合明『曇鸞教学の研究』
 - 3 『環境倫理学のすすめ』
 - 4 浄土真宗教学研究所報『ブラサーダ』創刊号
- （キーワード）教学、智慧、「いのち」

（龍谷大学講師）